

夢は人生のエンジン



●フロッグ

2021年、東京オリンピックで多くのメダリストたちは輝きました。

続いてパラリンピックでは西宮の大矢勇氣選手が車いす100mで見事銀メダル。

素晴らしい活躍に多くの人が拍手を贈りました！

でもわかってほしいことがあります。

オリンピック選手だけがアスリートじゃないよね。

パラリンピックで活躍した選手だけがパラアスリートでもない。

目標としていたパラリンピックには出られなかったけど、子どもころからの自分の思いを胸に今もチャレンジを続けている隼人さんが西宮にはいます。



●シーン1 晴れやかな日

200X年5月X日

隼人（24歳）は泣いた。今日は嬉しくて泣いた。

長居陸上競技場でのジャパンパラリンピック陸上競技大会（※1）脳性麻痺T36クラス男子400m競走決勝を自己ベスト記録で制した喜びに泣いた。

「隼人、がんばってよくここまで来たな。」

正面スタンドでこぶしを握って見つめていた高井先生も、こみあげてくるものを抑えられなかった。五月の陽光はまぶしく、この日は青空の美しい日だった。

改めて時間をその20分ばかり前に戻そう。

・・・5月X日、午後3時20分

本年度のジャパンパラリンピック男子400mの決勝のスタートが迫っている。

大阪の長居競技場で開かれたこの大会に高井先生も駆け付けた。高井先生は隼人の中学の時の陸上部顧問である。

「先生、いよいよジャバラ（ジャパンパラリンピック）で日本一をめざして走ります。」との連絡をもらい大阪なら間に合いそうだ・・・もういてもたってもいられなくなりこの日の部活の指導を終えて長居競技場まで車を飛ばした。

息を切らせてスタンドまで上がってトラックを見おろす。

そこには堂々たるパラ陸上アスリートとして隼人がスタートラインに立っていた。

トラック上の颯爽（さっそう）とした彼の姿を見るのは嬉しい。私にも力がみなぎる。

変わらないが変わったことが一つある。いや、変わったというより備わったという言い方が正しい。それはアスリートとしてのプライドである。続けることによってしか備わらないプライド。

すでに隼人は陸上10年選手だ。出発地点でコールを待つ姿も、スターティングブロックをセットするしぐさも、もう堂々としたものである。

だが今日は新たに400mでの日本一挑戦だ。

「隼人が400mだって？」 トラック一周するんだぞ。

100mをまっすぐ走るだけでもハラハラしていた中学時代を思い出す。

おお、あの隼人がジャパンパラリンピック400mレースの決勝の舞台に立っている。

夢のようだ。

スタートも近づいて緊張が大きな競技場を包む。

いよいよだ。

「パン！」号砲が鳴る。

ピタリと決まる会心のスタート、いいぞ。

最初の曲走路を駆け抜けバックストレートをぐんぐん飛ばしている。

腕もきれいに振れている。本当に力強いレースをするようになったものだ。

最後のカーブを曲がった時にはすでに先頭、腕と脚のリズムもとてもいい！

「腕を振れ、前に出ろ・・・」1着で飛び込んだゴール、

電光は・・・75秒30

見事自己ベストでの優勝だ。自己ベストは陸上競技選手にはこの上もなく嬉しい。

「すごい！！ こんな日が来たんや。」

高井先生の目は勝手に出てくる涙であふれた。



※1 現在ではジャパンパラ陸上競技大会という名称になっている。

●シーン2 屈辱の日

199X年10月X日。

隼人（14歳）は泣いた。悔しくて泣いた。

フライングで失格してしまった。

男子100m予選、隼人はその2組2レーンから退出しなさいと審判から指示された。

この日ようやくたどり着いた夢に見たスタートラインだったのに・・・

隼人は中学に入り、何部に入ろうか、心の中では決めていた。でも悩んだ。

そもそも、どこだったらボクの入部を受け入れてくれるのだろうか・・・

ボクは手にも足にも障がいがある。そのうえ言葉もうまく出ないときている。

そんなボクにも1年生のクラブ活動入部式の日はやってきた。それぞれの希望のところで立ち上がり、先輩の誘導で校内の活動場所へ散っていく。

ドキドキしながらその時間が過ぎていく。

ボクは陸上競技部のところで思い切って立ち上がった。

人生にはそんな時間が必ずある・・・



陸上競技部に入ったものの、そもそもボクはまっすぐ走れない。

「位置について、ヨーイ・・・」

(現在では「On Your Marks,Set・・・」という)

スタートというのは体をきちんと止めないとダメなんだ。

ボクは緊張したらよけい反射的に体が動いてしまう。

ボクには脳性麻痺という障がいがある。

そんなボクも練習を重ねた。

そしてようやく試合に出場できる日が来たのだ。

ヨーイで止まれるし、レーンを外れず100mをまっすぐ走り切れるところまでできたぞ。

でも、初めての日の緊張には勝てなかった。

「あっ！」・・・動いてしまった・・・

フライング失格の判定が下された。



スターティングブロックをセットしている時から隼人に障がいがあることは誰にでもわかる。

そんな2レーンの選手があっけなくフライング失格だ・・・

地元の中学生在が参加する小さな一大会じゃないか。

教育的配慮も少しはしてあげられないものか・・・

見ていたら多くの人がそう感じる場面かもしれない。

失格を告げたスターターの勝元先生も、そのとき実は葛藤があったと、あとで高井先生に告げてくれた。(※2)

高井先生は答えた。

「スターターのあなたはスターターとして当然のことはただけです・・・そう思ってくれただけで、お気持ちは汲み取りました。

ありがとう。

今回のことでもっと練習しますよ、きっとあの子は。」

それは、その通りとなった。

※2 30年前において脳性麻痺者の中学生短距離アスリートは西宮市では初めて、かつ隼人一人であり、ルールを適用する限りスターターとしても失格判定はやむを得なかった。

●シーン3 積み重ねた若い日々

もっといっぱい走った、泣いた、悩んだ、怒った、沈んだ。
立ち直った、前を向き直した、また次の試合に挑んだ・・・

いろんな試練は隼人に数限りなく押し寄せてきたが、それでも隼人は陸上競技を続けた。

高校に行っても、大学に行ってもやめなかった。

長居競技場で400m競走日本チャンピオンを勝ちとったあの瞬間も含め陸上競技に打ち込んだ日々は20代を通して続いた。100mや200mでも隼人は脳性麻痺T36クラスのチャンピオンとなり3連覇を果たしたこともある。

当然、パラリンピック出場も目標にしたが、標準記録の壁をなかなか破れず、その夢は実現できなかった。

それでも、パラアスリートとしての誇りを持つには十分の大活躍だった。

そんな隼人も30歳を越えた。

どんなアスリートにも自分の身体の限界を感じる時はやってくる。

隼人も例外ではない。

その上、脳性麻痺ではどうしても避けられない痙縮（けいしゆく）（※3）との向き合い、それも、やはり自分には自分だけのフィジカルの個性や特性がある。

第一線から退く決意をした。



※3 筋肉が緊張しすぎて、手足が動かしにくい、勝手に動いてしまう状態のこと。

●シーン4 お礼を言えた日

一線を退くと、ふとあの日を思い出すことがある。

そう、あのフライングの日のことだ。

ボクをフライング失格にしたあの日のスターター勝元先生に無性に会いたくなった。

会ってお礼が言いたくなった。

顧問だった高井先生は、その頃は校長先生になっていて中学校の阪神地区陸上競技部長の役を引き受けておられた。「会えるかな・・・」相談してみた。

「もちろんだ！隼人がその気なら明日でも会えるぞっ。」

次の阪神地区大会の日、開会式前を見計らって競技場で会えることになった。

およそ20年振りだ。ドキドキしていた隼人だが、その日は来てしまった。

陸上競技会の朝は早い。高井先生は尋ねてみた。

「勝元さん、もう15～6年以上前になるけど、私の学校のあの生徒のこと覚えてる？」

「忘れるわけじゃないですよ。私にとっても中学生の陸上指導者としていろんなことを考えさせられた子でした。中学卒業しても陸上続けていることは聞いていたのでホッとしていたんですけど・・・」

「あの子、日本のパラ陸上界ではトップアスリートになったんですよ！どうしても勝元さんに会いたいと、今日、あなたにお礼のあいさつに来るそうだ。少しの時間でいいので会ってやってくれ。」

思わぬ訪問者の知らせに日頃の豪放磊落（ごうほうらいらく）に似合わずドキドキする勝元先生だった。

隼人はもちろん中学生期のことを思うと、アスリートらしい大人の体躯（たいく）となっているが脳性麻痺の障がいもたらず彼は彼なりの四肢の機能の特徴はいまもそのままである。

発語についても相変わらず苦労する日々は続いている。

そんな隼人だが、どこでも一人で出かけ行動をする。

陸上競技大会の朝は各校顧問の先生方が手分けして各部署の準備に大忙しでにぎやかだ。

そんな先生方も一息つく開会式前のひと時、約束通り、隼人と勝元先生が出会う時が来た。



短い時間だったがそれは感動的な場面だった。

精一杯の言葉と声で、何度も何度も礼を言う隼人。

それに対し、なんだかホントに照れて汗まで吹き出しそうになっている勝元先生。

ずっと隼人を見てきた高井先生にとっては、あの長居競技場で隼人が勝った瞬間を見た時の喜びにも劣らないステキな時間だった。

高井先生は懐古（かいこ）するように言った。

「二人を見ている私が一番ドキドキしていたんじゃないですか、うれしくて。それと同じくらい、あの時の周りを囲む陸上部顧問のたくさんの先生方の笑顔の輪も忘れられません。脳性麻痺の隼人が20年陸上を続けてきたことが、彼だけ一人の価値でなく、ちょっと大げさに言えば、社会の価値に進化した、そんな朝だったかもしれない。」

この日、勝元先生と会えたおかげで隼人のアスリートライフには一つ区切りがつけられた。

●シーン5 子どもたちの前で

隼人にも40歳が近づいてきた。

今も、脳性麻痺という障がいのことを十分わかってもらえてないと思うことが多い。

自分なりの生き方は存分にしてきたつもりだが、そのことと目の前の暮らしの中で今日また出会う人たち、とりわけ子どもたちからの無理解の目線に出会うと今も悲しくなる。

初めて出会ってビックリされること、遠目で見られて避けられること・・・は今もある。

わかってる、大人は上手に自分の感情をやりくりできても、子どもは無理だってこと。

特に初めて会う子はボクを見てビックリしてしまう。

わかっけていてもつらい。

隼人は決心した。

ボクが存在をボクだけのためにわかってもらうのを目的にするのではなく、ボクと同じ障がいのある人が同じように苦勞していることにも思いを寄せて地元の小学校や中学校に出向いて子どもたちに語り掛けようと決心した。

正直それはかなりドキドキする挑戦なのだが、ボクの人生振り返ってみたら、これまでドキドキ続きもいいところだ！

それに、小も中も我が母校じゃないか。

みんな後輩だ！！と思ったら少し気楽かな（笑）

今、母校の先生方のうれしい理解とさまざまな協力のおかげでそれが実現しつつある。

202X年7月X日

隼人（39歳）は母校の中学校の生徒のまえで、自分が何を
して来たかを語っている。

実は音声は、パソコンの人工音声だ。時折、関西弁バージョン
などがまざって面白い。

21世紀のIT技術の進歩著しいことにはあれこれと驚かされる
のだが障がいのある人が自分を表現する新たなツールが登場し、
可能性を広げる大きなサポートになっている。

それに加えて隼人のプレゼン企画のセンスもおもしろい。

今、こうして、隼人は自分の住む地域の子どもたちに思い切り
語り掛けている。

「夢は人生のエンジン」だよ、と。



●エピソード

障がいがあってもなくても人は夢を持ち、それを追ひ、それをめざし、チャレンジもあれば挫折もしながら前に向かって進んでいく。

ボクも、今だってその途中で。

これからは、ボクが愛する陸上競技の指導者として、脳性麻痺の陸上アスリートがうまくスタートできるための研究や貢献をしていきたい。(※4)

障がいの種別に関わらずパラアスリートの道をめざしてみたいと思う子どもがいたら助けたい。

パラアスリートの理解を皆さんの中でもっと進めることができればますますうれしい。

ボク自身の障がいのことも理解してほしい。

その願いがあるのはもちろんだけどボクには、ボクの夢が今もある。

ボクも自分の夢をエンジンにこれからの人生を駆けてゆくつもりだ。



※4 隼人はすでに、中学校の陸上競技部顧問の先生に向け「陸上競技短距離種目における障害（脳性麻痺アトーゼ型）のある競技者のクラウチングスタートの一考察」というレポートを発表している。

第2次西宮市人権教育・啓発に関する基本計画

西宮では、一人ひとりの「人権（じんけん）」が尊重されるまちをめざすため、令和元年から10年間の人権教育・啓発についての計画をつくりました。

この計画では、

- ◇一人ひとりの『自己肯定感』を高める～子供も大人も、みんな「大切な存在」～
- ◇一人ひとりが『多様性』を認め合う～みんなちがってあたりまえ～

これらの「2つのキーワード」を「一番大切にしたいこと」として、これらの視点を踏まえた取組みを進めていきます。

人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 23

令和4年（2022年）3月発行

西宮市・西宮市教育委員会

文：白井 弘一

画：米光 智恵

※作中の名前等は一部を除き仮名です。



令和4年（2022年）3月発行

編集：西宮市

〒662-8567 西宮市六湛寺町10番3号 ☎(0798)35-3320